

日常の学校生活から

学校空間の学習環境を再設計し、
さらに「場の選択肢」も拡充する

大熊町教育委員会教育長 木村 政文

① 「主体的・対話的で深い学び」を引き出せる学習環境の要件は何か？



▶□ 学校生活拠点を
「**知のBase**」にする。

学習センター
「**ワクワク本の広場**」
を居場所にして、



子どもたちには、
考えるためのネタ（知識・
経験）を蓄えさせ、



学び・探究の**成果物**を
ポートフォリオとして、
「ワクワク本の広場」に
蓄える。

② 場面に応じた4象限選択（ほどよい個別/集合×ほどよい対面/ネット）は可能か？

キーワードは、
ダイバーシティ（Diversity）

- ▶ □ 大人も交えた、
縦割りの人間関係で。
- ▶ サテライトに異業種のプロフェッショナルが集い、児童生徒、教職員へヒントを提示。
- ▶ 学校教育のDX化





▶ □ つまずき、失敗を恐れず、

体験し、失敗から学ぶ姿勢
を徹底。



繰り返し、繰り返し。
コツコツと。



そして、熟練。



プロを目指す。



エキセントリックな学び

9

ふむふむ研究所
(従来の教科の教
室)

エキセントリックな学び

～正解に最短、最速にたどり着く教育から

逆にゆっくり、「なぜ」を問う教育への転換～

子どもたちに、課題を持たせ、その課題を、ゆっくり、じっくりと、自分ごととして考えさせることが、**学びの基礎体力を上げる**ことになる。

教師も同じ。

教師が自らの学校の教育の一つ一つについて、ゆっくり、じっくり、自分ごととして考えることが、**教師力を高める**ことになる。

③ 「異才（ギフテッド）の生徒」「発達特性の強い生徒」が力を発揮できる
空間をつくるには？



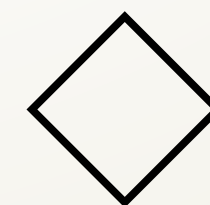
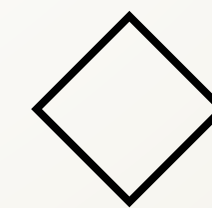
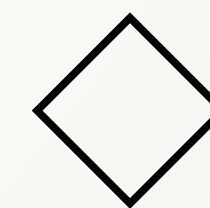
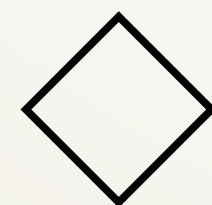
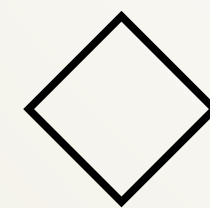
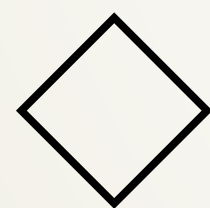
インクルーシブでユニバーサルデザインな
場と活動をめざして



朝のミーティング

学び直し

共に学ぶ

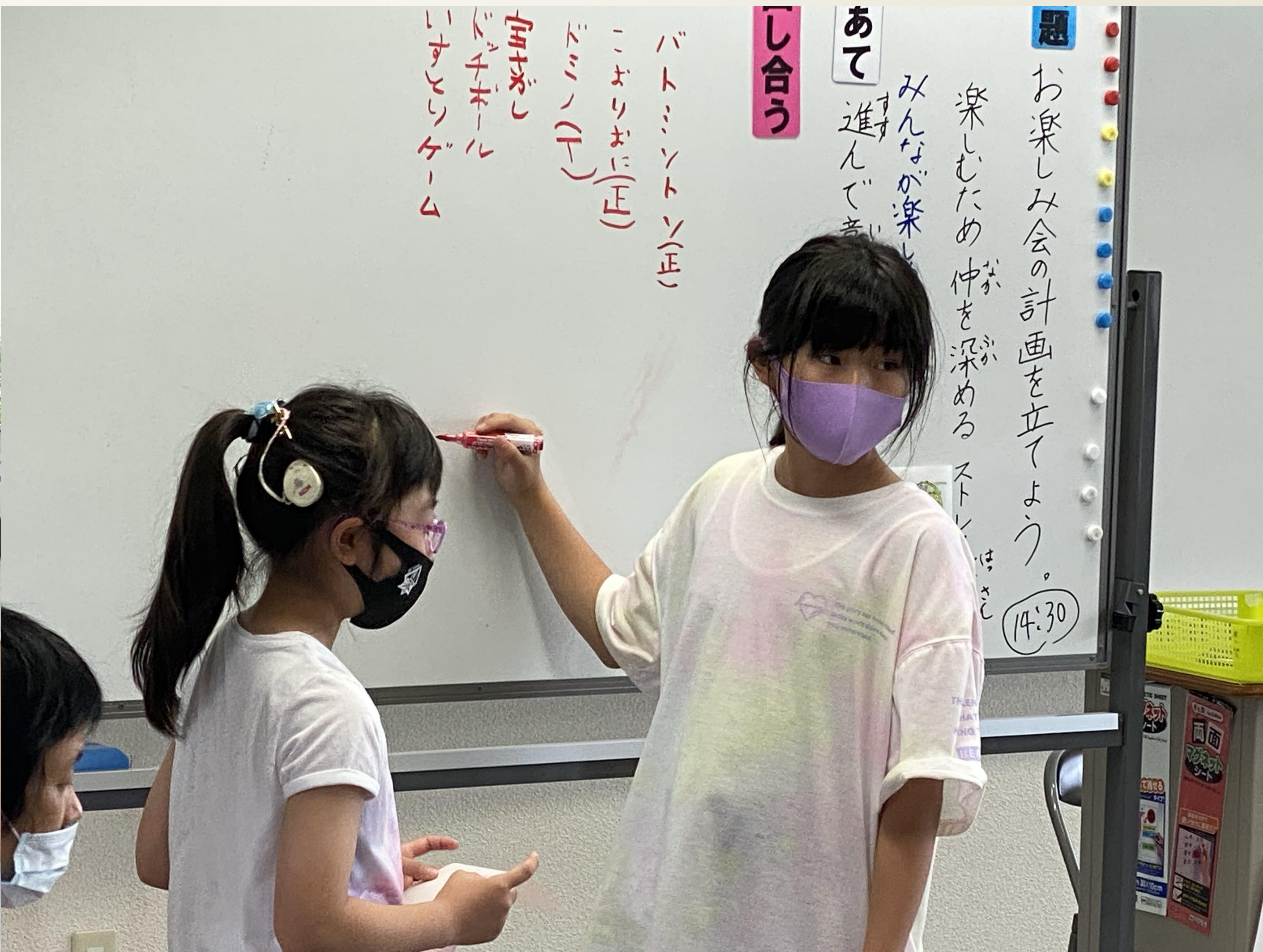


インクルーシブでユニバーサルデザインな活動とは

～ 異年齢、障がいの有無、国籍、性別を超えて ～

- できる、できないで分けない。
- 時間、空間、ツールの保証
- 協働→自らの力で関わり合いを持ち、
役割を果たす。

異年齢集団（小1～中1）による 「朝のミーティング」



「学び直し」

国籍：中国
年齢：56歳

大熊から若松避難 大竹さん学び直し



生徒らと一緒に授業を受けている大竹さん

「感謝の手紙書きたい」

大熊町から会津若松市に避難している大竹英子さん

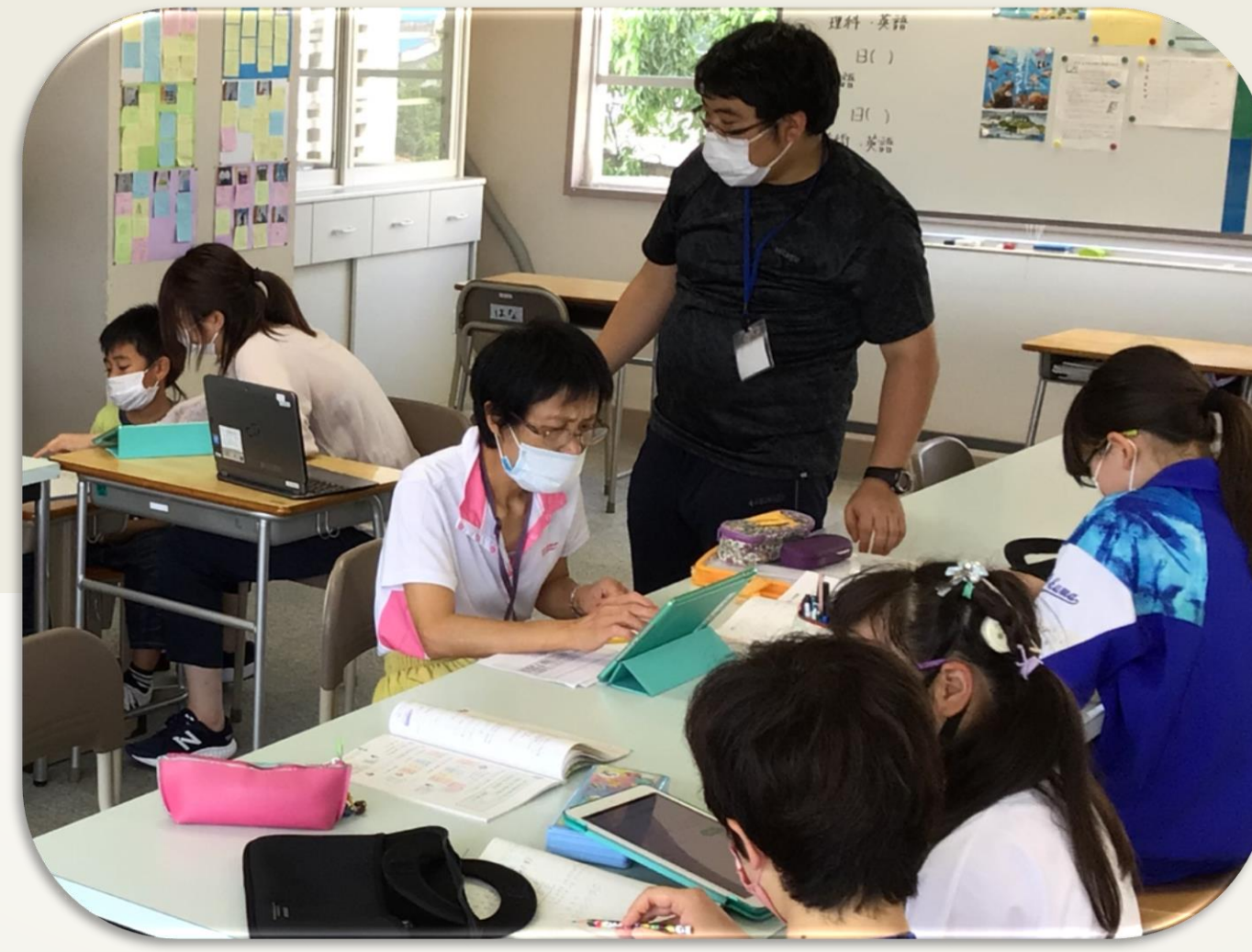
（56）は、同市で学校生活を続ける大熊町の熊町、大野両小、大熊中の児童、生徒と一緒に授業を受ける。中国から来日し、高校までの勉強を一通り経験したが、「日本語をもっと勉強し、お世話になった皆さんに感謝の手紙を書きたい」との思いで基本を学び直している。

中国出身の大竹さんは1991（平成3）年に来日し、長年大熊町で生活。日本と中国の架け橋となる交流活動に取り組み、子ども

たちに中国の文化を教えるなどしていた。震災と原発事故に伴い会津若松市に避難。同市で大熊の学校が再開することを知ると「もう一度、基本を勉強したい」という思いが湧き上がった。学校にお願いして、2011年に小、中学、高校の範囲で学び直しを始めた。今年で10年となるが「『てにをは』など（助詞）が分かりづらい」と、日本語の難しさを再認識している。

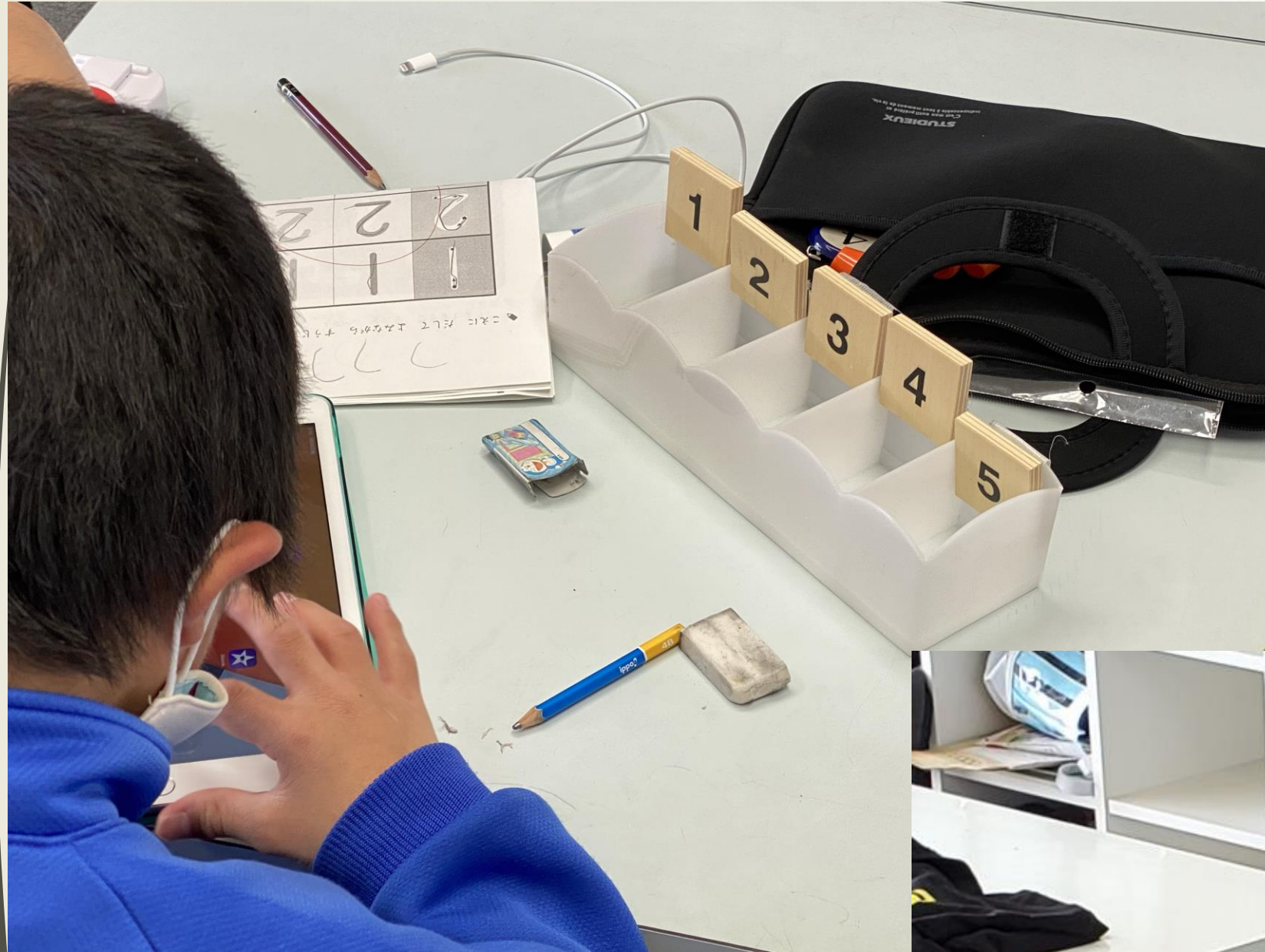
「人生で出会う人は数限られるので、出会った人との縁を大事にしたい」と大

竹さん。手紙にこだわり、学び続けて人との縁をつなげていく考えだ。



福島民友
2021.6.23

障がいのある子もない子も「共に学ぶ」教育



<ダウン症>



<感音障がい>



<知的障がい>

